

履の白眉は、華麗な衲御礼履

— 展示頻度の高い逸品中の逸品 —

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

衲御礼履〈のうのごらいり〉と聖武天皇

衲御礼履というのは儀式用の履である。伝わる履類の中で最も保存状態がよく、かつ華麗な造りになっており、正倉院展でもよく出品される宝物の1つである。展示図録によると次のように述べられている。「底が浅く、つま先が反り上がり先端が二つに分かれる形の履。左右同形である。表は茜色に染めたスエード状のけば立てた牛裏革、内は染めないままの白革としそれを二枚合せ縫い、縫い目に金線をめぐらせ、断面あらわな部分には白色顔料を塗り化粧する。つま先には金線の縁取りがある扇形白色の革を貼る。また、表に花形の飾りを13個取り付ける。これらは銀製鍍金の台に、花卉の中央と先端に真珠、その他に色ガラスや水晶を嵌装したものである。履の中には、蘭筵いむしろの芯を麻布で包み、それを小唐花文の綾とさらに葡萄唐草文の白綾で二重に覆った底敷が入っている。大仏開眼会に際して、聖武太上天皇は、冕冠べんかんを被り帛衣はくえを着して出御されたと推測されるが、この赤い履はそのときの履き物と推測される。」

衲御礼履には収容する箱が残されている。これについて『正倉院寶物』全10巻(毎日新聞社)には「赤漆塗の箱があり、箱の底には、履が収まるように刳り込みが作られている。」と述べている。その作りから見て、特別な品物であったことが感じられる。



宝物の中でもスター級の衲御礼履。その華麗さを色で示せないのが残念である。

(資料:毎日新聞社刊「正倉院寶物」全10巻)

衲御礼履 南倉66

資料:長31.5 高12.5 爪先幅14.5(数字の単位はcm。以下同様)。赤染革 彩色(白)金線。飾金具は銀台鍍金 真珠・色ガラス・水晶を嵌込。底敷は表裏とも白綾 蘭筵の芯。

成瀬正和『日本の美術 No439:正倉院宝物の素材』の口絵には「御礼履」が掲出され、その説明文には従来から考えられてきている皮革素材の記述が見られるので、前記とやや重複するが、紹介しておきたい。

「外側に緋に染めたスエードの仔牛皮を、内側には染めないままの牛皮を貼って本体とし、爪先の下方や側面と底裏の合わせ部には白色顔料を塗り、付近には金の押し縫いを巡らす。外側には真珠、ガラス玉、水晶などを嵌入した銀製金鍍金の座金を綴じ付け、装飾としている。履の中にはイ筵の芯を麻布で包み、さらに白綾で覆った底敷きをいれる。」(文中の太字は出口の作成)

意外な調査結果、内貼りは鹿革

これに対して、今回の調査では以下の結果を得た。

底革：牛革と見られる。履材の芯になっている革は厚く、太い線維が散在するが、肌目は細かい。底部の先端は4層から成っている。側面の切り口は胡粉で白く塗られている。全体の線維の状態や肌目から見ても牛革であろう。

甲部：かなり太い革線維も見え、肌目が細かいので子牛革の可能性が浮かぶが、皺から見ると成牛革である。また、履を縫い上げるに当たって、縫い目の糸が外に極力出ないような工夫が施されている。

側面の革：牛革である。外側は赤色で、胡粉の食み出しも見える。赤色は芯まで赤く、鹿革と推定されていたが、顕微鏡写真では太い線維束が多く見えることから、牛革である。同じ牛革でも、これは、起毛状の牛革を用いた貴重な例である。この表面に出た組織は革の銀面側なのか、あるいは肉面側なのかについては、線維の細かさと血管跡がないことから牛革の表面側を削って造られたものと判断した。なお、革に柔軟性が残っているのは珍しく、植物染料の作用だろうか。側面革と底革とを縫い合わせた爪先部は、説明図2のように4層になっている。

内貼り革：顕微鏡で見る1本1本の線維の状態から鹿革と判断した。

側面革は銀深摺り革？

調査後の私の感想は、衲御礼履の側面革も誠に神秘的で、印象に残る宝物であった。というのは、材質は牛革と判断したが、牛革の染めた緋革はこれだけであること、そして意外なことは、牛革の表面側を削って革の組織を外に出した貴重な事例だと考えられたからである。線維の状態から見て

そのようにしか考えられないのである。

この緋革は従来から「スウェード調」の革とされていた。つまり、革の肉面側を削って外表にしたと考えられてきている。しかし調査の結果、従来の説を否定する可能性が出てきたことになる。この点は、革の断面が塗料によって観察できないことから線維の状態による判断であるので、将来、縫い合わせ部分の塗料が剥落するようなことがあれば確実に明瞭な判定が可能になる。従って、将来見直される可能性が残っていることを付言しておきたい。

側面革がそのような使い方だとすると、どのようにして素材を作ったのであろうか。薄い革が宝物の随所に観察されたことから、動物種の選定と同時に皮革を削るという技術が存在したことは確実である。しかもそれはかなり面積のある革についての技術である。例えばエスキモーがやっていたような、小さい刃物で削るという普通の方法ではない。薄い革に凹凸を感じさせる例は見かけなかったからである。もう少し技巧的であったと考えられるが、残念ながら具体的にはなかなか浮かばない。

なお、内貼り革は牛革ではなくて、鹿革であった。

ホームページでも皮革を紹介

以上のようなことから、この礼履の牛革の加工方法には思いもしないような新奇な情報が含まれている可能性があるし、鹿革も使っていることなど、超一級品にふさわしい発見であったと思っている。

この衲御礼履は宝物の中でも出品頻度の極めて高い品である。いわばスター級の宝物である。その理由は、前述のような由緒の他に華麗さがあること、及びほとんど完全な形で今日に伝わっているからである。正倉院事務所のホームページ『天平の煌め

き』の記事の2回目にこの衾御礼履を取り上げ、由来や特徴を紹介するとともに、皮革材質調査が行われたことにも言及している。

また、今回の正倉院展に関するホームページには、光明皇后による宝物献納1250年を記念した今年のテーマとして2つを上げ、1つは「聖武天皇関連」、もう1つは、「皮革」であった。そこでは「正倉院展では、宮内庁正倉院事務所が続けてきた調査研究の成果を発表することが多く、今回は、皮革製品の研究が一区切りついたので馬鞍、鼓皮残欠などが展示されます。実は、2002年と2003年の二カ年計画の研究でしたが、もう一年延長して2004年も実施されて、合計十五日に及びました。」と意義が強調されている。そこで展示品目で数えると異例の13点にもなり、「皮革」に因んだだけのことはあった。

展示に関しては読売新聞が精力的な報道を展開したことから、皮革に関心のある方々が沢山鑑賞されたのではないかと思っている。

聖武天皇の肖像画

今年、東大寺を興した聖武天皇（701～756）の1250年忌法要の年であり、その法事が4月30日同寺で行われた。朝日新聞の平成18年5月1日朝刊、奈良版によると「これに合わせて日本画家の小泉淳作さん（81）が描いた聖武天皇と光明皇后の「御影」が奉納された。」「奉納は横河電機（東京都）のメセナ事業で、小泉さんに制作を依頼した。奈良時代の天皇・皇后の肖像は残っておらず、平安時代のものなどが伝わるだけ。このため、古代の服飾に詳しい猪熊兼勝・京都橋大教授が考証し、唐の服装、正倉院の絵や布、高松塚古墳に描かれた青竜や虎などの図像をちりばめた。」と報じ

ている。写真に示すように、この肖像画に描かれた履は、紛れもなく衾御礼履そのものである。私の知る限り、この記事は他の地域の「版」には出なかったようである。私がたまたま親類の法事で奈良に宿泊したときに目にした記事であって、誠に幸運なことであった。偶然とはいえ、めぐり合えるべくしてめぐり合ったという思いであった。



没後1250年法要に際して奉納された聖武天皇像（小泉淳作画伯作）にも衾御礼履が描かれている。（資料：朝日新聞平成18年5月1日号奈良版）

名称「衾」に疑問の意見も

松嶋順正「正倉院よもやま話」の中で、衾御礼履という珍しい言葉について疑問の意見が述べられている。ちょっと長い文だが紹介したい。すなわち「……南倉所納の緋皮の履^{はきもの}は、聖武天皇が大仏開眼に参列の際に、お召しになったものと伝えられる。緋皮の表と裏とを縫い合わせ、皮の接目^{はきめ}に黄金線の押縫を施し、ところどころに珠玉をちりばめた金銀花座をかざった荘厳華麗な、まことに天皇の御料にふさわしい御履といえる。

かつて原田淑人博士は「北倉の御冠残欠はあるいは天平四年元旦に、聖武天皇がは

じめて冕服^{べんぷく}を着て、大極殿において朝を受けられた時の冕冠の残欠ではなかろうか。礼冠礼服が推想どおり袞冕^{こんべん}であったとすると、それに付属する礼履は当然『烏』でなければならない。新唐書車服志に袞冕の服制を記し、その履物として『烏加_二金飾_一』とある。金飾を加えるというのも、この礼履に純金の押縫を施しているのに一致する」と述べられている。

さて現行の御物目録には「衲御礼履 平城宮御宇後太上天皇御物」とあるが、衲御礼履とは御礼服の上に衲（補綴の意味）の御袞裳を召された場合に用いられる御履といわれている。この「衲御礼履」の名称は何によったものかと調べてみると、明治十五、六年頃の作成と思われる旧正倉院御物目録（現行の御物目録にたいして仮に旧御物目録という。未定稿の目録である）に「函盖張紙墨書云『衲礼履一具 太上天皇御履第五櫃』^{かんがい}但函盖不見当」とあり、当時すでに函盖は失われていたようであるが、張紙の墨書は何か記録されていたのであろう。

御物目録の名称はこれによったものと思われるが、私は衲御礼履という名称に疑問をもつものである。すなわち衲礼履の「衲」はあるいは「納」の伝写の誤りではなかろうか。なお検討を要するものと思われる。……]

秋の正倉院展出品の履

第58回正倉院展が大変な拝観者の来館で賑わったことは新聞に報じられたとおりである。実に20日間で28万3千人以上に達した。今回履物類で出品されたのは錦履と履（第10号）の2点である。

『展示図録』によると、前者は「表面に錦を貼った革製の履である。本品は履と中敷とから成る。履は底に厚い一枚革を用い、

爪先を反り上がらせて左右両側面の革に縫い付けている。近年の調査で革材は底、側面とも牛皺革であることが確認された。」としている。なお、本品の内底には「申／我孫伊可麻呂／八一日」、中敷の表面には「皮」の墨書がみられる。両者は異なった筆跡であり、「申」以下はこの履の製作者名と製作日を申告したもの、「皮」は意味不明ながら使用者による心覚えかと推測される。ここには「皮」の文字が残されていることから、あえて紹介しておく。

縫製時の三角針痕の発見

また、履第10号については「革製の履である。爪先を強く反り上がらせ、その先端を三稜の花形に作る。同種の草履は宝庫に三両と十七隻が伝わる。反り上がる爪先から踵までは一枚革で、そこに別の革で作った甲と左右側面を縫い合わせている。いずれも牛革で、縫製には突き刺しやすい三角針が使われている。…この種の履は一般に鼻高履^{びこうぐつ}〔鼻広履〕とも呼ばれ中国から伝わったものであるが、『令義解^{りょうのぎげ}』衣服令にみえる「烏皮烏^{くりからのせき}」に相当するといわれている。」と図録で述べられている。この文で太字にしたところは私どもが関わった革皮材質調査の結果を反映した記述部分である。



第58回正倉院展に出品された履第10号。両隻揃ったのはわずか三両しかなく、これはその一つである。

（資料：毎日新聞社刊「正倉院寶物」全10巻）

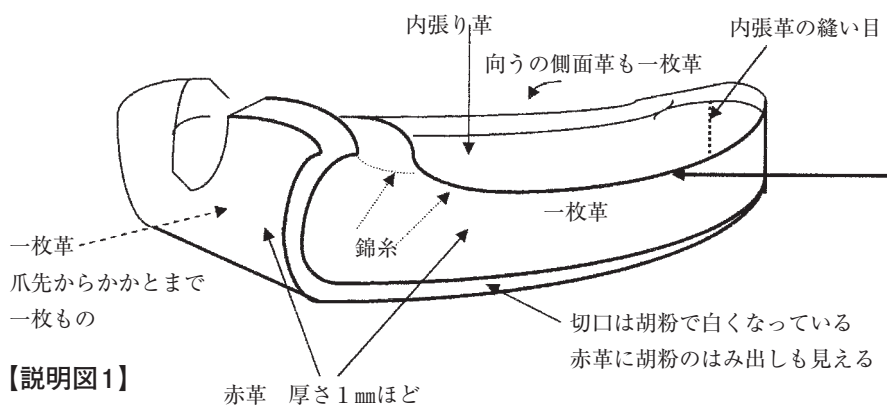
三角針については前報でも述べているが、実は筆者は、履底のこの縫い跡の痕跡

を発見したときは思わず驚きの声を上げたほどであった。というのは、今まで多くの伝承皮革の技術について調査をしてきた経験の中で、大阪の太鼓製造業者が必要に応じて三角針を使うことを知っていたからである。その一方では、正倉院宝物の解説や研究書の中では筆者の知るかぎり、三角針に言及した例をまったく知らない。従って、千二百年以上もの昔に、厚くて硬めの革の縫製に特別の工夫を凝らしていたことに感動したのである。そして、その技術的発明

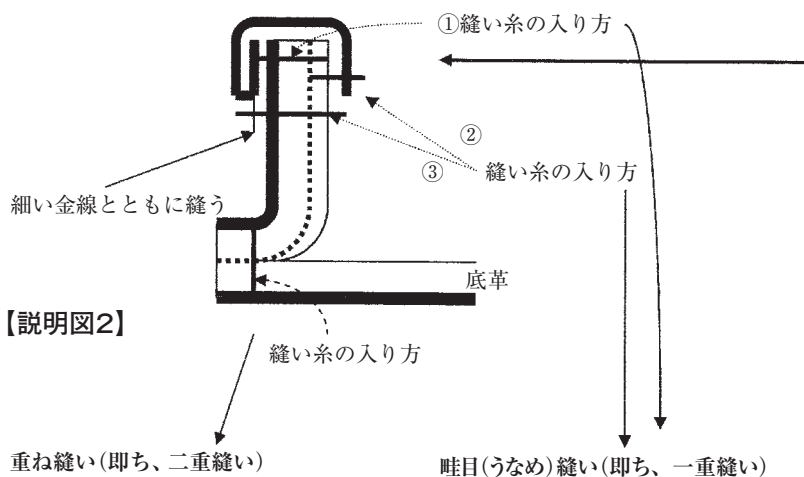
が今日でも実際に生きていることにも感動したのである。その後、業者に依頼して「現代の三角針」の実物を入手したことは言うまでもない。

なお、小澤調査員の現場における観察では、説明図3、4に示すようにこの履の縫い方に二通りあって、底革部分と他の部分とでは異なっている。そして、図に示すとおり美観も重視した縫い付けになっているのである。

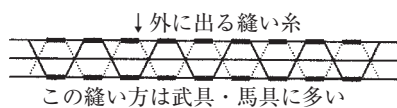
衲御礼履の説明図



【説明図1】

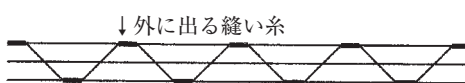


外に出る縫い糸が繋がるように並ぶ



【説明図3】

縫い糸が飛び飛びに並ぶ



※縫い方に関しては小澤正実調査員の解説

【説明図4】

この縫い方は武具・馬具に多い